

**助成年度：2019 年度**

[所属] 山形大学 農学部

[役職] 准教授

[氏名] 林 雅秀

[課題]

## **人口減少に対応した地域資源管理への制度化**

[内容]

人口減少に直面している山村集落にとって、共有林野の来訪型利用は従来からの権利者の利益をもたらさう。しかし、来訪型利用への移行にはさまざまな障害がある。本研究では、30 集落以上が観光ワラビ園を実施している山形県置賜地方の集落を研究対象として、来訪型利用のための制度変化のプロセスとそのパフォーマンスとの関係を明らかにした。調査対象地においては、1970 年代から 1990 年代にかけて観光ワラビ園による利用への制度変化が進んだため、この時期に発生した、①摩擦とその解消のプロセス、②集団間の制度イノベーションの普及プロセス、に注目した。

本助成研究に関連して調査した 5 集落について、ワラビ園開始前後の状況を比較したところ次のような結果となった。1970 年代後半の比較的早い時期にワラビ園という制度を導入した集団では、新制度の開始に伴う摩擦の話題を聞くことが出来た。一方、1990 年代と比較的遅れてワラビ園を開始した集団では、摩擦の話題はなく比較的スムーズにワラビ園事業を開始したものと考えられた。初期段階では、ワラビ園運営に関する不確実性が大きい、すなわち多くの外部者の入山を認めることで資源劣化やその他のトラブルを招くことにならないのか、ワラビ園として整備するために要した費用に見合うだけの収益が得られるのかどうか、という点で確信の持てる情報が存在していなかったため、推進派と慎重派での意見対立が起きていたとみることが出来る。